

1 馬と人の関わり

- 1 古墳時代の馬 1
- 2 馬の遺産 2

2 馬と我

- 1 馬の飼育のはじまり 4
- 2 牧の経営 4
- 3 上野の牧 5

3 馬と我

- 1 馬具の主な種類 9
- 2 古墳から出土した馬具 13

4 読者

- 付録1『出土馬具から見た古墳時代の上野』(右島和夫) 46
- 付録2『「倭馬」を説く一白井・吹屋遺跡群の調査』(井上昌美) 54
- 出品目録／参考文献／協力者・協力機関 60

1 馬と人の関わり

1 古墳時代の馬

日本列島に、馬が人の生活に関わりをもつようになったのは、古墳時代の中ごろ、5世紀に入ってからのことです。それを示す考古学的な資料は、馬そのものの存在を示す遺物の他にも、馬を表現した遺物は多種多様であり、これは他の動物と比べても特に目立ち、広く馬が利用され当時の社会に馬文化が浸透していたことの証といえます。

その頃の馬は体高(前脚の肩までの高さ)が120cm～130cmほどの小・中型馬です。そのことは、遺跡から出土した馬骨などから復元できています。

大阪府奈良井遺跡で埋葬された1体の馬は、体高約120cmあり、これは小型馬に属します。また、長野県宮田外遺跡の馬土壌の馬骨はほぼ完全に残っていて、体高約127cmあり、中型馬でも小さいほうにあたります。さらには、群馬県白井遺跡で放牧されていた馬はその

馬蹄跡の大きさから体高約130cmと推測されています。

現在でも見ることのできる在来馬では、小型馬はトカラ馬(体高108cm～120cm)、中型馬は木曾馬(体高127cm～142cm)と宮崎県都井郡の御崎馬(体高125cm～138cm)がよく知られています。

これらの馬は、明治時代後半以降の政府による品種改良の政策から、それぞれの事情により選れたものであり、江戸時代まで続いた在来馬の姿を伝えています。

今の競馬で用いられる馬は体高150cm以上の大型馬で、サラブレッドやアラビア種のように股が細く長い体型は競争用に改良されたものであり、脚長で股が太く放牧用に適した在来馬との体格の違いは明らかに異なっています。

馬種	地域	体高 (肩までの高さ)	備考
北海道産種 (俗称：道産子)	北海道	125～135cm	
木曾馬	長野県木曾地域、岐阜県稲佐地方	125～135cm	長野県天然記念物
御崎馬	宮崎県都井郡	100～120cm	国天然記念物
対馬馬	長崎県対馬	125～135cm	
野間馬	愛媛県今治市野間	100～120cm	今治市天然記念物
トカラ馬	鹿児島県トカラ列島	100～120cm	鹿児島県天然記念物
宮古馬	沖縄県宮古島	110～120cm	沖縄県天然記念物
与那国馬	沖縄県与那国島	110～120cm	与那国町天然記念物

表1 在来馬の種類

2 馬の遺産

中国の書物『三国志』『魏書東夷伝』の記述には「其の地には牛・馬・虎・豹・羊・麋・無し」とあります。



魏書東夷伝

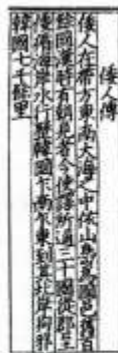
現在のところ出土状況が確実な馬の骨の例は、4世紀末頃以降なので、3世紀の率直呼の時代には、牛や馬等がいなかったわけですね。

古墳時代は、「日本が朝鮮半島を巡る国際情勢に積極的に関与していた時代」と言えます。「日本書紀」「古事記」「宋書倭国伝」「広開土王碑碑文」「三国史記」「三国遺事」等の国内外の文獻から、日本の勢力が朝鮮半島において活発な政治的・軍事的活動を行っていたことが伺われますが、これは、当時の東アジアにおける中心的な勢力であった中国の政治的動向が大きく関わっています。

中国では、日本の弥生時代にあたる時代に統一政権であった後漢が倒れ、魏・呉・蜀の三国時代や晋による統一を経て、五胡十六

国時代と呼ばれる群雄割拠の時代に入っていきます。五胡とは、漢民族のみならず、周辺の諸民族が大いに勃興し、覇を競った時代です。弥生時代は、中国王朝による政治的枠組み一環と藩封に依拠することで安定を保っていた時代であると言えます。それが後漢の崩壊による混乱によって安定を失ってしまいました。

当時、日本から中国へは「魏書東夷伝」の記述からも伺えますが、主に朝鮮半島を経由しての陸路による連絡であったようです。後漢による統制が失われると、朝鮮半島北部にワンダース系の韓民族による「高句麗」が勢力を築き、独自の活動を開始したので、日本から中国への連絡路は高句麗によって妨げられ、中国との連絡は途絶えがちになりました。情報の入手に苦慮するところとなりました。



魏書東夷伝

5世紀の朝鮮半島は、高句麗、新羅、百済そして南部の加耶諸国が共存していました。高句麗の広開土王の即位(391年)以来の戦いの模様が広開土王碑に記されていて、なかでも400年の戦争では、高句麗・新羅に対して、倭と任那加耶(金官加耶)と安羅(阿羅加耶)・百済が戦い、高句麗が勝利したことを伝えています。さらに高句麗は427年に都を南の平壤に遷すとともに南下政策を強め、百済への侵攻を繰り返して、475年には百済の都の漢城を攻めて百済王を殺し、一時的ではあるが国を滅亡させました。

百済は、南の熊津(公州)の地に都を遷して再建をはかる事になりますが、これらの一連の事件を通じて加耶と百済の多くの遺民が戦乱を逃れて南に下り、さらにその一部は海を渡って日本列島にまでやって来たと考えられています。

このような情勢のなかで日本列島(倭)の

勢力は、百済・加耶との友好関係を維持していました。その同じ頃5世紀前半の古墳に馬具の副葬が始まり、そして5世紀中葉以降に河内や信濃で馬の飼育が開始されるため、これには倭からの要請とともに、百済・加耶の支援によって、倭の武力強化のために馬と馬具が積極的に送り込まれたという状況が考えられます。

5世紀の古墳から出土する馬具の特徴は、5世紀の後半までは鉄製の轡と鉄板装りの輪轡が中心であり、5世紀後半以降には金葉や金板の表面を金メッキした鍔り金具が加わります。前者の馬具は、朝鮮半島南部の金海・釜山などの金官加耶のものに共通し、後者の馬具は、大加耶の中心地の高霊と陵川の出土品に類似があり、さらに百済の馬具にも共通した特徴が見出されます。このような馬具の故郷は、それを付けていた馬と馬具集団の故郷に直接つながると考えられます。

5世紀の朝鮮半島情勢
『古事記』の馬と山出山
福岡県立大学考古学研究所蔵